

## 女子大学生の職業探索行動と職業選択不安との関連 — 大学の就職支援に着目して —

小櫃 紀子・田中 奈緒子

### Career exploration and career choice anxiety among female university students from the perspective of career support provided by a university

Noriko OBITSU and Naoko TANAKA

The relationship between “career exploration” and “career choice anxiety” among female students attending a faculty of liberal arts in a university was investigated from the perspective of career support provided by the university. The results of 161 valid responses to the Career Exploration Behavior Scale and the Career Choice Anxiety Scale indicated the following: (1) Career exploration progressed along two paths: job understanding and self-understanding; which were only weakly correlated with career choice anxiety. (2) Cluster analysis of responses to the Career Exploration Scale extracted four clusters (High career-exploration, Low career-exploration, Career exploration using outside resources, and Career-exploration using university support). The group engaged in Career-exploration using outside resources had lower anxiety about self-understanding and job understanding paths than the group engaged in Career-exploration using university support. The above results suggest that career support provided by the university improved career exploration behaviors of female university students.

*Key words* : *Career Exploration* (職業探索行動), *Career Choice Anxiety* (職業選択不安)  
*career support by a university* (大学からの就職支援)  
*Female university students of Liberal Arts* (文系女子大学生)

#### 問題と目的

##### 大学生における発達課題としての職業選択

2013年の全労働者の離職率は15.5%であったが、中でも若年層の離職率は19歳以下で37.0%、20-24歳では26.0%、25-29歳では19.3%と、全労働者の離職率を上回っていた(内閣府, 2015)。さらに若年層の中でも新規学卒者は、2007(平成19)年の青少年白書(内閣府)以来、中学校卒業者の7割、高校卒業者の5割、大学卒業者の3割が就職後3年以内に離職する現象は「七五三現象」と言われ注目されてきた。大卒者に注目すると、1995年から2012年までの18年間では、2009年の28.8%を除き全ての年で3割強が3年以内に離職しており(厚生労働省, 2015)、その現象は一

時的なものではないことがわかる。日本では従来、学卒後に就職した会社で正社員として定年まで働く男性像が労働者モデルとされてきたが、バブル崩壊により雇用形態や労働者が多様化した。更にワークライフバランスの重視など社会情勢の変化により転職に対する考え方も変化し、キャリアアップを目的としたポジティブな面にも注目され、転職が必ずしもネガティブなものであるとは考えられなくなったが、同じ環境下での継続したキャリア形成の機会は失われるとも言えよう。このことから、新卒時の職業選択は重要なものであると考えられる。

大学生は、エリクソンの心理社会的発達段階におけるアイデンティティ確立の時期とされる青年期にあり、成人期への移行期でもある。

Havighurst (1953/1958) は自らの職業を選択することをこの段階の発達課題の1つとして挙げている。澤田・岡田・光富・山口・井上 (1992) によれば、生涯を通して見られる移行の中でもこの時期の職業を選択するという決断は、人生周期上の大きな危機となることが指摘されている。この学生から社会人への移行のプロセスにおいて重要視されているのが就職活動であるが、近年就職活動に影響を与える要因の一つとして不安が挙げられている。

### 大学生の職業選択に関する不安

不安は日常生活の様々な場面で感じるものである。生田 (1994) は、正常な水準であれば不安を自己の統制内において対処することで負荷に対する耐性が作られることから、不安こそが自己の維持に関与しているとする不安のポジティブな意味を指摘する一方、神経症者では不安からの自己防衛の失敗が自己の統一的機能を妨げることも指摘している。したがって青年期に不安とどのように関与するかは重要な問題であると考えられる。

社会人への移行期における就職活動に関する不安に着目した研究は、様々な視点から行われてきた。坂柳 (1996) は「職業選択やその後の適応をめぐる職業キャリアの問題から生じる気付き」を職業的不安と定義して尺度を作成し、大学生を対象に検討を行った。その結果、男子よりも女子が、卒業年である4年生よりも非卒業年である3年生や1・2年生の方が職業的不安が高いことを明らかにしたが、杉山・新川 (2014) は、職業を選択する不安は3年生と4年生とでは差がないことを示した。また藤井 (1999) は、就職活動に関する不安とストレスおよびうつ水準が強く関連することを示した。北見・茂木・森 (2009) は就職活動を経験している学生は行っていない学生に比べて精神的健康状態が悪いという結果を踏まえ、就職活動を行う学生への精神的負担を考慮することは、今後のキャリア支援に重要な役割を果たすとしている。松田・新井・佐藤 (2010) は多くの先行研究で不安がキャリア選択や就職活動に否定的な影響を与える結果が出ていることを踏まえ、不安の程度や変化を把握することで就職活動が停滞している学生を早期発見する目安として活用できると提案している。

学生の就職に対するサポートとしては様々な資

源があるが、與久田・太田・高木 (2011) によれば、就職など将来についての援助要請先として大学生は、家族、友人、教員、専門家の順に挙げている。しかし、友人サポートは進路未決定者にとってはかえって職業的不安を高めており、4年生においては大学サポートが自己効力を通して職業的不安を軽減していることが明らかとなっている (赤田・岩槻, 2011)。

現在大学は、就職支援センターなどを設置し、学生に対する就職活動についての助言や情報提供など支援に力を入れている。学生にとって大学からの支援は利用度は低いものの重視度が高い (下村・木村, 1994)。したがって大学による支援が学生の職業選択不安に対してどのように機能しているのか検討する必要性が考えられる。

### 大学生の職業選択に関する行動

大学生における就職活動は、様々な情報を考慮しながら、最終的に自分の就きたい企業を1社選択する意思決定行動であるといえる (下村ら, 1994)。意思決定の理論的背景としては藤原 (2007) は、Gellatの意思決定モデルを参考に、目標を決め、情報を集め、情報の関連性を検討し、可能な選択肢の結果を考慮し、それぞれの選択肢の結果を評価するというステップであるとしている。つまり、情報を集めることが重要な要因の一つであることがわかる。

情報の内容に関して下村 (1996) は、文系大学生の情報探索時期による検討をおこなった。その結果、職業選択に関連する心理的な準備状態が整っている、つまり職業レディネスが高い者や4年生は、就職活動における職業決定段階の初期に自己関連情報の探索を行っていたのに対し、職業レディネスが低い者や3年生は職業決定段階の後期に自己関連情報の探索を行っていた。したがって、まず自己関連情報により作られた選択基準に従い選択肢をいくつか選び、後に客観的情報を得る事で最終判断がなされることを示唆した。

情報探索行動が就職活動に与える影響を検討する指針として、就職に関する情報収集・情報探索の尺度が作成されてきた。下村ら (1994) は、自分に関する情報、企業に関する情報、就職活動に関する情報の3つのカテゴリーを想定した44項目からなる質問項目を作成したが、矢崎・齊藤・高井 (2007) はそれを参考にさらにどのような情

報源から入手したかについてもわかるような51項目からなる就職に関する情報探索行動尺度を作成した。この尺度の一部を利用した矢崎・齊藤(2014)は、就職活動中の大学生及び短大生では企業の特徴についての探索を多く行った者ほど内定獲得後の就職不安が低いことを明らかにした。一方で、杉山ら(2014)は就職に関する活動と職業選択への不安との関連についての検討を行い、大学生女子は活動を多く行っているほど不安が高いことを示した。このように就職活動中の学生の不安についてはまだ一定の知見が得られておらず、検討の余地があると思われる。

以上のことから、本研究では、大学生の職業を探索する行動と職業選択不安との関連を明らかにし、その行動に関して最も身近な機会である大学の就職支援がどのように機能しているのかを検討することを目的とする。行動と不安の特徴を捉えることで、現在の大学による就職支援が学生に対してどのように機能しているか把握し、今後の支援の発展に役立つ示唆が得られるのではないかと考える。

またその際、職業選択のための探索行動の実態を把握するため、職業に直接結びつく専門分野を専攻していない学生を対象とする。井島・西村(2014)によれば、結婚・出産など女性特有のライフイベントにより一旦は離職しても、資格取得をした専門職は非専門職に比べて再就職が容易であることが示唆されており、直接職業に結び付きにくい文系学科の学生の職業選択の重要性や困難さはより高いことが想定される。

## 方 法

### 調査協力者と調査方法

都内4年制A女子大学で文系学科の3年生・4年生を対象に無記名の個別式質問紙調査を2015年5・6月に実施した。

全回答者180名のうち、回答に不備のあった19名を除いた161名の回答について分析を行った。学年別の有効回答者数は3年生110名、4年生51名、平均年齢は20.53歳( $SD = .62$ )であった。所属の学科は、文学系が52.2%、心理学系が47.2%、語学系が0.6%だった。調査時点での第一希望の進路・職種は、就職希望者は事務系42.2%、営業

系が13.7%、販売系が7.5%、その他が21.1%であり、進学希望者は9.9%、その他が1.9%、未回答が3.7%であった。

### 調査手続きおよび倫理的配慮

ホームルームや講義時間内に集団実施し即時回収、或いは個別に配布し、後日個別回収の形式で実施した。なお、質問紙の表紙に、研究の主旨および調査への参加が任意であり、データは個人が特定されない形で処理する旨などの倫理的配慮について明記した。質問紙の回答をもって調査協力の同意を得たものとみなした。

### 質問紙の構成

①フェイスシート：学科・学年・年齢・志望進路及び職種。

②職業探索行動の測定：就職に関する情報探索行動尺度(矢崎ら, 2007)を参考に、A女子大学で配布されている就職ハンドブックなど数種の就職関連資料により項目を追加し51項目を作成した。これら全ての項目について「配布物やイベントなど大学の支援を通して行った」(以下「職業探索行動(大学)」とする)、「それ以外の機会を通して行った」(以下「職業探索行動(大学以外)」とする)の2つのルートそれぞれについて「1. 全くあてはまらない」から「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

③職業選択不安の測定：職業を選択するにあたりどのような不安を感じているかをとらえるために、松田ら(2008)が作成した職業選択不安尺度(32項目、5件法)を用いた。職業選択不安は、大学生の就職活動前から比較的長い期間経験される、職業を選択することから生じる不安と定義されている。「自己理解不安」(13項目)、「職業移行不安」(8項目)、「職業理解不安」(6項目)、「決定方略不安」(5項目)の4下位尺度から構成されており、「1. 全くあてはまらない」から「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。なお、職業選択不安尺度については、事前に開発者に使用の許諾を得た。

## 結 果

### 職業探索行動の構造

職業探索行動(大学)と職業探索行動(大学以外)について、「1. 全くあてはまらない」は1

点、「2.あまりあてはまらない」は2点、「3.どちらでもない」は3点、「4.少しあてはまる」は4点、「5.非常によくあてはまる」は5点と得点化したうえで、職業探索行動（全体）は両者の平均値とした。職業探索行動（全体）について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況（14.959、3.552、1.352…）と因子の解釈可能性より、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで2因子解を指定して主因子法・Promaxによる因子分析を行い、十分な因子負荷量を示さなかった項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax

回転による因子分析を行った。最終的な因子パターンと因子間相関をTable 1に示す。なお、回転前の2因子で33項目の全分散を説明する割合は56.09%であった。

第1因子は、22項目で構成されており、「企業側の説明の仕方について知る」「企業の方針や今後の動向について知る」「会社説明会やセミナー等に参加する」など、職業を理解するための行動を示す内容が高い負荷量を示していた。そこで「職業理解行動」因子と命名した。第2因子は、11項目で構成されており、「今までの人生で嬉し

Table 1 職業探索行動（全体）の因子分析結果（Promax回転後の因子パターン）

項目番号	項目	I	II
27	企業側の説明の仕方について知る	.95	-.20
33	企業の方針や今後の動向について知る	.89	-.06
51	会社説明会やセミナー等に参加する	.88	-.15
21	人事の人の印象について知る	.85	-.12
26	企業の労働条件について知る	.83	-.03
42	企業の社風について知る	.83	.02
39	企業の福利厚生について知る	.82	-.07
8	企業の規模や知名度について知る	.81	-.06
16	企業の採用方針について知る	.80	-.06
37	企業の給与について知る	.79	-.02
44	企業の業務内容について知る	.79	.08
20	企業の勤務地について知る	.76	.09
47	就職後の昇進や昇格について知る	.72	.09
32	会社訪問をする	.70	-.09
7	職場の雰囲気について知る	.64	.11
29	面接の受け方について知る	.64	.12
30	企業分析ノートを作る	.61	.07
1	必要な知識やスキルを知る	.59	.02
45	就職活動に必要なマナーの講座を受ける	.58	.19
10	コース別採用について知る	.57	.17
36	体験談を聞く（見る）	.55	.11
24	やりたい仕事と職種について研究する	.55	.23
12	今までの人生で嬉しかったこと・辛かったことについて考える	-.08	.83
48	大切にしていること（言葉）について考える	-.08	.78
19	何故今の大学・学科を選んだのかについて考える	-.12	.74
14	得意なこと・苦手なことについて考える	.00	.71
25	夢中になっていたことについて考える	.09	.71
43	自分の成長を最も実感した時のことについて考える	.15	.68
9	自分が小さい頃に憧れていた職業について考える	-.21	.57
11	自分の専攻と職業との関係について考える	.09	.55
31	自分が仕事でやりたいことについて考える	.17	.54
46	アルバイトやボランティアの経験について考える	-.01	.53
38	友人にどういふ人だと言われるかについて考える	.26	.52
	因子間相関		II
		I	.54

かったこと・辛かったことについて考える」「大切にしていること(言葉)について考える」「何故今の大学・学科を選んだのかについて考える」など、自分を理解するための行動を示す内容が高い負荷量を示しており、「自己理解行動」因子とした。

次に、それぞれの因子に0.5以上の因子負荷量を示した項目から、因子名と同名の下位尺度を構成した。ここでは各下位尺度の合計点を項目数で割った値を下位尺度の得点とした。2つの下位尺度間の相関係数を算出した結果、有意な中程度の正の相関( $r = .54, p < .01$ )が見られた。

また、学年により相違が見られるか、学年別の下位尺度間の $t$ 検定を行った(Table 2)。その結果職業情報のみ有意差が見られ、自己関連情報には差は見られなかった( $t(145) = -6.70, p < .001, t(152) = -.566, n.s.$ )。この結果を見ると、3年生( $N = 98 \sim 105$ )と4年生( $N = 49$ )では自己関連については同程度、職業情報については3年生よりも4年生の方が行動を行っていることが示された。

#### 職業選択不安

「1. 全くあてはまらない」は1点、「2. ほとん

どあてはまらない」は2点、「3. どちらでもない」は3点、「4. ややあてはまる」は4点、「5. とてもよくあてはまる」は5点と得点化し、松田ら(2008)に基づき、「自己理解不安」「職業移行不安」「職業理解不安」「決定方略不安」の4つの下位尺度を構成した。ここでは各下位尺度の合計点を項目数で割った値を下位尺度の得点とした。4下位尺度についてのI-T相関係数およびCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、「自己理解不安」は $\alpha = .93$ 、「職業移行不安」は $\alpha = .83$ 、「職業理解不安」は $\alpha = .86$ 、「決定方略不安」は $\alpha = .87$ であった。

また4つの下位尺度間の相関係数を算出した。その結果、「自己理解不安」と「職業理解不安」、「決定方略不安」の間には強い正の相関が、「職業移行不安」とその他の不安の間には弱い或いは中程度の正の相関が見られた。

また、学年により相違が見られるか、学年別の下位尺度間の $t$ 検定を行った(Table 3)。その結果「自己理解不安」 $t(156) = .18, n.s.$ 、「職業移行不安」 $t(157) = -.56, n.s.$ 、「職業理解不安」 $t(155) = 1.77, p < .10$ 、「決定方略不安」 $t(157) = 1.62, n.s.$ であり、「職業理解不安」のみ有意傾向が見

Table 2 学年別職業探索行動得点

		3年生 ( $n = 99 \sim 105$ )		4年生 ( $n = 49 \sim 51$ )		$t$ 値
		$M$	$SD$	$M$	$SD$	
職業理解行動	大学	2.63	.82	3.18	.92	-3.75***
	大学以外	2.22	.79	3.49	.92	-8.68***
自己理解行動	大学	2.96	.85	2.71	.97	1.64
	大学以外	2.84	.96	3.23	.91	-2.43*

\*\*\* $p < .001$ , \* $p < .05$

Table 3 学年別職業選択不安得点

		3年生 ( $n = 108 \sim 109$ )		4年生 ( $n = 49 \sim 50$ )		$t$ 値
		$M$	$SD$	$M$	$SD$	
自己理解不安		3.38	.96	3.35	.91	.19
職業理解不安		3.68	.91	3.40	.90	1.77 <sup>†</sup>
決定方略不安		3.21	1.02	2.92	1.06	1.62
職業移行不安		3.65	.86	3.73	.74	-.56

<sup>†</sup> $p < .10$

られた。

**職業探索行動による類型化**

職業探索行動を分類するために、職業探索行動の2つの下位尺度（職業理解行動・自己理解行動）の得点について大学・大学以外それぞれを変数とした階層的クラスタ分析（Ward法）を行った。用いた変数はZ得点化し、個体間の距離は平方ユークリッド距離で測定した。得られたクラスタを比較し解釈可能性を重視した結果、4クラスタ解を採用した。Figure 1に、4クラスタ分類における職業探索行動の4下位尺度得点のクラスタパターンを示した。

選択した4つのクラスタの特徴を調べるため、一元配置の分散分析により職業探索行動の4つの下位尺度得点の差を検討した結果、4つのクラスタ間に有意な差が見られた（Table 4）。

各クラスタの特徴は以下のとおりである。

第1クラスタは、大学以外の自己理解および職業理解に関する職業探索行動だけが高かった。このグループは大学からのサポートではなく他の情報源を探し利用していることから、「学外職業探

索行動優位群」と命名した。第2クラスタは、4つ全ての下位尺度得点が他のグループに比べて低いことから、「職業探索行動低群」と命名した。第3クラスタは、4つ全ての下位尺度得点が他のグループに比べて高いことから、「職業探索行動高群」と命名した。第4クラスタは、大学を通じた自己理解行動に関する職業探索行動だけが高かったが他の職業探索行動は中程度行っていたことから、「学内職業探索行動優位群」と命名した。

次に学年によるパターンの違いを検討するため、4つのグループと学年とのクロス表を作成し、 $\chi^2$ 検定を行った（Table 5）。その結果有意な人数の偏りが見られ（ $\chi^2 = 46.37, df = 3, p < .001$ ）、職業探索行動高群と学外職業探索行動優位群は4年生が有意に多く、職業探索行動低群と学内職業探索行動優位群は3年生が有意に多かった。このことから、3年生はまだあまり職業探索行動を行っていない者と大学の支援を利用し自己理解に関する探索行動を行っている者が多く、一方4年生は大学の支援に加え大学以外の機会を利用し幅広く職業探索行動をしている者と主に大学以外の

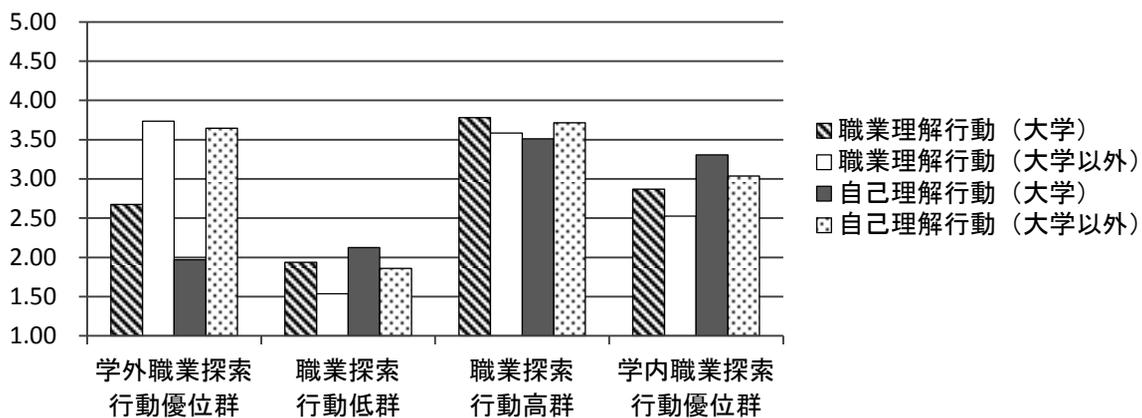


Figure 1 職業探索行動のクラスタパターン

Table 4 クラスタ別職業探索行動得点

		1 学外職業探索行動優位群 (n = 18)	2 職業探索行動低群 (n = 34)	3 職業探索行動高群 (n = 28)	4 学内職業探索行動優位群 (n = 62)	F値	多重比較 (Tukey HSD)
職業理解行動	大学	2.67	1.94	3.78	2.87	40.12***	3>4・1>2
	大学以外	3.74	1.53	3.58	2.53	69.57***	1・3>4>2
自己理解行動	大学	1.97	2.12	3.51	3.31	49.37***	3・4>2・1
	大学以外	3.65	1.86	3.71	3.04	50.75***	3・1>4>2

\*\*\*p<.001

Table 5 クラスタ別学年内訳 (人, %)

	3年生	4年生	計
学外職業探索行動優位群	4 (22.2)	14 (77.8)	18 (100)
職業探索行動低群	29 (85.3)	5 (14.7)	34 (100)
職業探索行動高群	9 (32.1)	19 (67.9)	28 (100)
学内職業探索行動優位群	53 (85.5)	9 (14.5)	62 (100)

$\chi^2 = 46.37, df = 3, p < .001$

括弧内は行和の%

機会を利用して自力で行動している者が多いことがわかった。

#### クラスタ別職業選択不安

クラスタ別に職業選択不安を検討するために、一元配置の分散分析により職業選択不安の4つの下位尺度得点の差を検討した。多重比較の結果、「学外職業探索行動優位群」は「学内職業探索行動優位群」よりも自己理解不安、職業理解不安が有意に低かった (Table 6)。このことから、学外の情報やイベントなどを利用して職業探索を行っている者は、大学内の就職関連イベント等を利用して探索行動を行っている者に比べて自己理解及び職業理解に対する不安が低いことが明らかになった。

### 考 察

本研究の目的は、大学生の職業を探索する行動と職業選択へ不安との関連を明らかにし、その行動に関して最も身近な手段である大学の支援がどのように機能しているのかを検討することであった。

職業探索のための行動において、自分に関する情報の探索は学年による違いは見られなかった

が、職業理解に関する行動は3年生よりも4年生の方が行っていた。4年生は最終学年であり、就職活動の本番の年であるという状況から、このことは了解可能なことである。また職業を選択する不安は3年生、4年生は同程度感じており、杉山ら (2014) の結果を支持するものであった。

職業探索行動を大学からの支援と大学以外の機会を通じたものに分けた場合、4つのタイプに分けられ、3年生は大学からの配布物やイベントといった就職活動支援を利用して探索を行っている者が多く、次にあまり行動を行っていない者が多かった。4年生は幅広く行動している者や学外で自ら行動している者が多かった。学外で活動が主体の学生について、4年生は3年生と同様の大学の支援を得てきたことは十分に考えられることから、既に大学の支援による情報探索を行った後に学外の資源の利用へと移行したものと考えられる。

職業探索行動の4タイプにおいて、大学の支援によらず自らの力で他の資源を利用した行動が多い者は、主に大学内で行動を行っている者よりも、自分自身の理解及び職業に対する理解への不安が低かった。前者は主に4年生であり、前述の通り大学内での探索行動は既に行っていると思わ

Table 6 クラスタ別職業選択不安得点

	1 学外職業探索行動優位群		2 職業探索行動低群		3 職業探索行動高群		4 学内職業探索行動優位群		F値	多重比較 (Tukey HSD)
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
自己理解不安	2.85	.84	3.41	1.22	3.31	.96	3.52	.77	2.33 <sup>†</sup>	4>1*
職業移行不安	3.56	.78	3.89	.93	3.55	.98	3.73	.70	1.10	
職業理解不安	3.07	.92	3.59	1.13	3.54	.92	3.77	.75	2.56 <sup>†</sup>	4>1*
決定方略不安	2.58	1.19	3.23	1.28	3.10	.95	3.18	.89	1.70	

\* $p < .05$ , <sup>†</sup> $p < .10$

れることから、自分を理解する探索行動や職業を理解するための探索行動をより多く行っていることが不安の低減につながったものと考えられる。一方職業へ移行することへの不安や職業を決定することへの不安に学年差が見られなかったことは、どちらもまだ直面する段階ではないために、漠然としたものとしてとらえていることが考えられる。

以上のことから、女子大学生の職業探索は、まず大学の支援を利用した職業探索を行い、就職活動が進むに従い学外の一般的な資源を利用するように行動の幅が広がり、そのことが不安の低減につながる可能性が示唆された。赤田ら(2011)は学校サポートが自己効力を高めることで間接的に職業的不安を低減していることを示した。Albert Bandura(1995 本明・野口監訳 1997)は目標達成のために必要な行動の計画や遂行に自己効力が関係することを指摘し、その自己効力を創出・増進させるための要素として制御体験、代理体験、社会的説得、生理・感情状態の4つを挙げている。本研究における大学支援の役割は、代理体験、社会的説得として機能した可能性が考えられる。代理体験とは、他者に目標達成のための能力があることや成功する様を見たり聞いたりすることで自分にもできるのだという感覚を得ることであり、社会的説得とは、言語的説得とも言われ、自らの行動における努力や結果を他者から評価されること、励ましである。代理体験はモデルとなる他者と自分に類似性が高いほど影響を受けやすいとされており、同じ大学の卒業生の就職活動の体験を示すことは、自己効力に強い影響を与えることができるだろう。また、例えば本調査を行った大学では就職活動の進捗をWEB上で報告できるようにするなど、学生との連携がとりやすいよう工夫がされている。大学のキャリアセンターなど就職活動の専門機関と自分の就職活動の進捗や結果を共有することは、進捗や結果に対する評価や助言を受ける機会につながりやすいだろう。このように本研究の結果からは、大学サポートが赤田ら(2011)と同様に不安の低減に寄与する可能性が見出せたとも言えるだろう。

一方で代理体験は、就職活動が進むに伴い内定獲得者とそうでないものが出ることで赤田ら(2011)が挙げたような孤立感にもつながりうる。

また言語的な説得は結果が出なかった時には効力を失いやすい。そこで赤田ら(2011)が提示したような職業情報の不足や相談先がないことなどの環境的不安に対する支援としての大学の機能が期待される。本研究における大学以外の資源の中には、一般的なWebサイトや個々の企業説明会など個別の活動になるものも含まれていることが考えられ、主に大学以外の場で行動をする学生に対しても孤立感の低減のための支援も必要だろう。重視度が高いものの利用度は低い(下村ら, 1994)ことを踏まえ、より学生が利用しやすいよう、支援の提供についての工夫が求められているとも言える。

本研究は4年生の就職活動が活発化し始める時期に行われたため十分な協力が得られたとは言えず、この結果から一般化できる知見が得られたとは言い難い。大学に来る機会の少ない4年生の協力を得るための調査の工夫が求められる。また本研究では3年生と4年生を就職活動の推移としてとらえ解釈したが、ある学年について縦断的に検討を行うことで、積み重ねられた行動と不安との関係がより明らかになることが期待される。

## 引用文献

- 赤田太郎・岩槻優美子(2011). 職業的不安に対する大学・短期大学のキャリア教育の現状と課題—ソーシャル・サポートと自己効力が与える影響から—, 龍谷大学紀要, 33, 77-88.
- Albert Bandura(1997). 激動社会の中の自己効力, 本明 寛・野口京子(監訳), 金子書房, (original work published 1995)
- 藤井義久(1999). 女子学生における就職不安に関する研究, 心理学研究, 70(5), 417-420.
- 藤原美智子(2007). ハリィ・ジェラット: キャリア発達における意思決定, 渡辺三枝子編, 新版 キャリアの心理学, ナカニシヤ出版, 91-105.
- Robert J. Havighurst(1958). 人間の発達課題と教育—幼年期から老年期まで—, 庄司雅子(訳), 牧書店, (original work published 1953)
- 井島由佳・西村純一(2014). 女子大学卒業生の初職転職理由に関する研究: A女子大学卒業者を中心にして, 東京家政大学研究紀要, 54

- (1), 63-71.
- 生田 孝 (1994). 精神病理学による不安の理解, 清水将之編, 不安の臨床, 金剛出版, 21-34.
- 北見由奈・茂木俊彦・森 和代 (2009). 大学生の就職活動ストレスに関する研究—評価尺度の作成と精神的健康に及ぼす影響—, 学校メンタルヘルス, 12 (1), 43-50.
- 厚生労働省 (2015). 新規学卒者の離職状況に関する資料一覧.
- 松田侑子・新井邦二郎・佐藤 純 (2010). 就職不安に関連する研究の動向, 筑波大学心理学研究, 40, 43-50.
- 松田侑子・永作 稔・新井邦二郎 (2008). 職業選択不安尺度の作成, 筑波大学心理学研究, 36, 67-74.
- 内閣府 (2007). 平成19年度版 青少年白書.
- 内閣府 (2015). 平成27年度版 子供・若者白書.
- 坂柳恒夫 (1996). 大学生の職業的不安に対する研究, 広島大学 大学教育研究センター 大学論集, 25, 207-227.
- 澤田英三・岡田 猛・光富隆・山口修司・井上 弥 (1992). 大学から職場への移行, 山本多喜司・S・ワップナー, 人生移行の心理学, 北大路書房, 205-222.
- 下村英雄 (1996). 大学生の職業選択における情報探索方略—職業的意思決定理論によるアプローチ—, 教育心理学研究, 44 (2), 145-155.
- 下村英雄・木村 周 (1994). 大学生の就職活動における就職関連情報と職業未決定, 進路指導研究, 15, 11-19.
- 杉山効平・新川貴紀 (2014). 大学生における就職不安とキャリア意識との関連, 北方圏学術センター年報, 6, 97-107.
- 矢崎裕美子・齊藤和志・高井次郎 (2007). 就職に関する情報探索行動尺度の作成, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 54, 127-134.
- 矢崎裕美子・齊藤和志 (2014). 就職活動中の情報探索行動および入社前研修が内定獲得後の就職不安低減に及ぼす効果, 実験社会心理学研究, 53 (2), 131-140.
- 與久田巖・太田 仁・高木 修 (2011). 女子大学生の援助要請行動の領域、対象、頻度の大学生生活不安および社会的スキルとの関連, 関西大学『社会学部紀要』, 42 (2), 105-116

## 謝 辞

本研究にご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

---

おびつ のりこ (昭和女子大学生生活心理研究所特別研究員)  
たなか なおこ (昭和女子大学大学院生活機構研究科)

